

小 1 年

あ	の	一	ねん
お	は	な	よ
し	ら	な	い
し	り	お	

滋賀県書道協会賞

小林 莉央

小 1 年

て			
つ			
た	い		
し	い		

滋賀県書道教育研究会賞

黒川 陽依

小 1 年

し			
た	い		
し	い		
き	い		

京都新聞賞

横井 源一郎

幼稚園

よ	う	ほ	ま
し	ら	し	か
い	げ	い	げ
ひ	る	た	し
ゆ	ん		

京都新聞賞

蛭田 駿

小 2 年

中	主	二	年
す	さ		
い	く		
せ	ら		
ん	な		
の	み		
花	木		

京都新聞賞

中村 心菜

小 2 年

金	ぜ	二	年
思	た		
い	の		
や	し		
り	い		
の	一		
心	日		

滋賀県教育委員会教育賞

中塚 彩友

小 1 年

ま	き	の	ひ
が	し	一	ねん
た	か	ぎ	ほ
の	み		
く	さ		
つ			
み			

滋賀県書道協会賞

高木 暖心

小 1 年

た	ま	か	わ
一	ねん	ご	と
う	ゆ	い	
て			
つ			
た	い		
い			

滋賀県書道協会賞

後藤 結衣

小 2 年

こ	ま	つ	二	年
大				
き	ひ			
く	ま			
さ	わ			
い	り			
た	の			
	花			
	が			

こまつ二年 村上ヤキ

滋賀県書道協会賞

村上咲萌

小 2 年

長	は	ま	二	年
す	さ			
い	く			
せ	ら			
ん	な			
の	み			
花	木			

長はま二年 竹内 みお

滋賀県書道協会賞

竹内 みお

小 2 年

あ	土			
ろ	雨			
の	上			
大	が			
き	が			
な	り			
に				
じ	七			
	い			

あ土二年 はしのみやち

滋賀県書道協会賞

橋野 心倅

小 2 年

高	月	二	年	
み				
を	ト			
つ	マ			
け	ト			
ま	が			
し				
た	赤			
	い			

高月二年 なたぎり なぎや

滋賀県書道協会賞

片桐 渚紗

小 3 年

き	生	川	三	年
も				
を	犬			
う	の			
み	プ			
ま	チ			
し	が			
た	子			
	と			

き生川三年 青山ヤキ

京都新聞賞

青山咲稀

小 3 年

青	山	三	年	
物				
を	び			
し	わ			
ら	湖			
べ	に			
よ	す			
う	む			
	生			

青山三年 木原葉乃

大津市教育委員会教育長賞

木原葉乃

小 3 年

が	も	生	西	三	年
の					
よ	午				
う	前				
い	中				
を					
す	音				
る	楽				
	会				

がも生西三年 向いまなか

滋賀県知事賞

向井愛佳

小 2 年

し	ん	旭	北	二	年
雨					
と	あ				
か	じ				
た	さ				
つ	い				
む	の				
り	花				

しん旭北二年 うめやわやくら子

滋賀県書道協会賞

梅澤 桜子

小 4 年

とらひめ四年	雲	
くに友かれん	が	青
	う	い
	か	空
	ん	に
	で	
	た	白
		い

滋賀県書道協会賞

國友佳蓮

小 4 年

はやみ四年	つ	
西田めい	め	空
	て	き
	宿	箱
	へ	に
	送	荷
	る	物
		を

滋賀県書道協会賞

而田愛彩

小 4 年

全勝 四年	お	
田島実乃里	い	び
	し	わ
	い	湖
	野	水
	菜	て
	と	作
	米	る

滋賀県書道教育研究会賞

田島実乃里

小 4 年

高宮 四年	白	
白石千紗	い	大
	ひ	空
	こ	の
	う	か
	き	な
	雲	た

滋賀県書道教育研究会賞

白石千紗

小 5 年

綾野五年	舟	
藤井遥愛	を	湖
	こ	上
	ぐ	の
		波
	白	風
	い	
	雲	小

滋賀県書道教育研究会賞

藤井遥愛

小 5 年

米原五年	な		
中川菜桜	つ	勢	音
	て	の	楽
	美	声	会
	しく	が	で
	く	一	の
	心	つ	合
	に	の	唱
	残	ハ	部
	った	ー	の
		モ	歌
		ニ	
		ー	に
			大

京都新聞賞

中川菜桜

小 5 年

金勝 五年		
谷口ひより	印	絵
	象	手
	的	紙
	な	の
	言	文
	葉	章

滋賀県教育委員会教育賞

谷口ひより

小 4 年

城東小 四年	の	
伊藤 早来	手	体
	伝	育
	い	委
	を	員
	す	の
	る	仕
		事

滋賀県書道協会賞

伊藤早来

小 5 年

マキノ南五年	し	
	が	大
	の	き
	宝	な
物	だ	わ
		湖
		は

滋賀県書道協会賞
里田陽飛

小 5 年

今東五年	花	
	畑	一
	の	面
	中	黄
	を	色
	歩	い
	く	菜
		の

滋賀県書道協会賞
中川ひなた

小 5 年

新南五年	赤	
	い	色
	を	し
	た	火
	星	の
	直	径
	は	
	地	球
	の	半
	分	ほ
	ど	で
	そ	の
	表	面
	に	は
	ク	レ
	ー	タ
	ー	が
	あ	り
	ま	す

滋賀県書道協会賞
大澤 暖

小 5 年

守山五年	花	
	畑	一
	の	面
	中	黄
	を	色
	歩	い
	く	菜
		の

滋賀県書道協会賞
大久保和佳

小 6 年

瀨田北小六年	私	
	た	ち
	の	脳
	は	
	体	の
	動	き
	を	
	読	み
	取	っ
	て	
	そ	れ
	に	合
	わ	せ
	た	
	心	の
	動	き
	を	呼
	び	起
	こ	し
	ま	す

滋賀県書道協会賞
林 佳菜子

小 6 年

今東小六年	ら	
	の	び
	わ	湖
	の	伝
	統	漁
	法	で
	す	
	る	仕
	か	け
	で	ア
	ユ	を
	取	る
	昔	な
	が	
	作	
	編	ん
	で	
	竹	を
	編	ん
	で	
	作	

京都新聞賞
宇都宮 奈緒

小 6 年

島小六年	夜	
	空	を
	見	上
	げ	る
	と	
	ま	た
	た	
	く	星
	の	間
	を	
	白	い
	雲	が
	ま	る
	で	
	川	の
	よ	う
	に	流
	れ	て
	行	っ
	た	

滋賀県知事賞
森 愛実

小 5 年

新南五年	景	
	観	美
	を	し
		い
	守	び
	ら	わ
	う	湖
		の

滋賀県書道協会賞
金子心暖

中 2 年

滋賀県書道研究会賞

坂尾悠那

川の流れ 静かな高原
夕焼け空 遠い海鳴り

湖西 二年 坂尾悠那

中 2 年

京 都 新 聞 賞

須山美咲

私たちの一日一日の暮らしは、労働で体力・エネルギーを消耗させ、その消耗した体力を回復させることによって、翌日の労働の準備をする。ということのくり返しです。このくり返しの中で、消耗した体力の回復をおこなううえで、最も大切なことからは、食糧の摂取です。食事をすることによって、消耗した体力・エネルギーを直接に回復、補填することができるところから、河相一成著「日本の米より」

河瀬 二年 須山美咲

中 2 年

滋賀県教育委員会教育賞

入江 向日葵

夕立や砂に突き立つ青松葉
遠泳や高波越ゆる一列

安曇川 二年 入江向日葵

中 1 年

滋賀県書道協会賞

近藤美里

ダーウィンは、小さいころから長い時間をかけてじっくりと自分自身の個性と好奇心を育てあげながら、学問に新しい世界を開拓した学者である。瀬田北中一年 近藤美里

中 3 年

滋賀県書道協会賞

佐野莉々子

通りから校門へと続く坂道は、吉野桜など卒業生の記念樹が美しく咲き誇っている。

仰木 三年 佐野莉々子

中 3 年

京 都 新 聞 賞

山岸真緒

水のある景色は、人の気持ちを和ませる。なかでも湖は、いつも青く静かな水をたたえて、訪れる人たちを魅了し続けてきた。
高月二年 山岸真緒

中 3 年

滋賀県知事賞

江崎 遥

山川水車 永久春光
東風平和 開花成長

長浜南中 三年 江崎遥

中 2 年

滋賀県書道協会賞

藪内愛香

伝説 大地 幸福 運動
意味 青空 新茶 高原

南郷中二年 藪内愛香

高 1 年

京 都 新 聞 賞

江 畑 慎 太 郎

唯だ天下の至誠は、能く化することを為す。
内に省みて疲しからず、志に悪むことなし。
諸れを己に有して而る後に諸れを人に求む。
長 浜 北 高 一 年 江 畑 慎 太 郎

高 1 年

大 津 市 教 育 委 員 会 教 育 長 賞

奥 出 一 真

日進月歩 青山横北郭
晴耕雨読 松風有清音
河瀬高一年 奥出一真

高 1 年

滋 賀 県 教 育 委 員 会 教 育 長 賞

河 村 ま ひ ろ

作品を書くこと、というのは、ただ筆をもって書けるものではない
ません。何か感動をあるものから受けて、その影響で自分の
心が動きだし、書きたいと思う幻影が頭の中に作りだされ
ます。出来上がった書の姿がは、きりとした形でないまでも
見えてくるわけです。つまり：東大津高一年 河村まひろ

中 3 年

滋 賀 県 書 道 協 会 賞

本 田 楓 花

若者 自然 活気 新生
太陽 朝礼 集合 現象
河瀬中 三年 本田楓花

高 1 年

滋 賀 県 書 道 協 会 賞

田 中 初 音

花はやかに、月はくまなきをのみ見るものは、雨に
むかひて月をこぼしたれ、あて春の行く方知らぬも、
なほあはれに情ふかき。咲きぬべきほどの梢、散り
しをれたる庭などこそ見所おほけれ。筆頂田中初音

高 1 年

滋 賀 県 書 道 研 究 会 長 賞

番 野 志 織

梅雨がなければ、どんなに私はものたぬことであろう。それは
春と夏との間に特殊な風情をつくっている。梅雨は稲を育て、
森を育てる。梅はさくらみ、ヒラは色づき、草木は多くの栄養を撰
取して夏に備える。長雨は大気中のチリを流し、空気を浄
化してくれる。 米原高校 一年 番野志織

高 1 年

滋 賀 県 書 道 研 究 会 長 賞

木 村 綾 那

夢のような人だから
夢のように消えるのです
その定めを知りながら
捲られてきた季節のページ
落ちては溶ける粉雪みたい
止まらない想い
愛さなくていいから
遠くで見守って
強がってるんだよ
でも繋がっていたんだよ
あなたがまだ好きだから
もと泣けばよかった
もと笑えばよかった
バカだなんて言っ
気にするなんて言っ
あなたにただ逢いたくて
福山雅治「最愛」より
彦根総合高1年 木村綾那

高 1 年

滋 賀 県 書 道 研 究 会 長 賞

山 下 晏 奈

雪は天からの贈物、ヒラヒラと音もなく舞いおりる姿は、
白い花びらのよう。そのひとひらを受けとめると、一瞬、小さな
六角形の結晶が見え、スッと消えて行く。つかの間の短い命
だから、こそ美しく、かひとときわ心に残る。安曇川高校 一年 山下晏奈

高 1 年

日本人は我を張ったり自己主張することを強く抑制されている。幼児のころから我を張らずまわりと調和し、みんなと同じように行動することを求められるのである。「和を以て貴しとなす」は、聖徳太子以来、日本人の行動原理であるが、これは、日本人が稱作を受け容れた二千年以上も前から今日まで日々の生活の中で練り上げられたものといえよう。草津高校一年 三村 瑚々桜

滋賀県書道協会賞

三村 瑚々桜

高 1 年

昭和二十年「当用漢字表」により、字体の整理が行われました。それに伴い、新字体にそった筆順整備の必要性が説かれるようになり、新たな基準作りが求められるようになりました。それを受けて、出版されたのが昭和三十三年の「筆順指導の手びき」です。
堅 田 高校 一年 中塚 風花

滋賀県書道協会賞

中塚 風花

高 1 年

人類は小さな球の上で
眠り起きそして働き
ときどき火星に
仲間を欲しがったりする
火星人は小さな球の上で
何をしているか 僕は矢口らない
(或は各州にキルル、ハウしているか)
しかしときどき地球に
仲間を欲しがったりする
それはまったくたしかなことだ
万有引力とは
ひき合ひ孤の虫のかである
宇宙はひずんでいる
それ故みんなは求め合ひ
宇宙はじんじん膨らんでゆく
それ故みんなは不安である
二十億光年の孤独に
僕は思わずにせみをした
谷川 俊太郎 詩
伊吹高校 一年 甲斐沼 紗帆

滋賀県書道協会賞

甲斐沼 紗帆

高 1 年

誰にも見せない涙があった。人知れず流した涙があった。決して平らな道ではなかった。けれど確かに歩んで来た道だ。あの時想ひ描いた夢の途中に今も何度も何度もあきらめかけた夢の途中。いつもの日々を越えて迷い着いた今がある。だからもう迷わずに進めばいい。栄光の架橋へ。悔しくて眠れなかった夜があった。恐くて震えていた夜があった。もう駄目だと全てが嫌になって逃げ出そうとした時。想い出せばこうしてたくさん支えの中で歩いて来た。悲しみや苦しみの先にそれぞれ光がある。さあ行こう。振り返らず走り出せばいい。希望星に満ちた空へ。
「栄光の架橋」より 八日市高校 一年 國重 百葉

滋賀県書道協会賞

國重 百葉

高 2 年

今更帰れないよあの場所は
どんな素敵な思い出も
心にしまっておくべきなのさ
今でも思い出すよそれで
いいんだ心配ないよ
また歌えるよいつか帰るよ
僕だけのHOME
急な通り雨暮る奇立ち
心に掃き溜め
あれからいつの季節を
越えてもまだ聞こえてくる
故郷の声格好つけて
飛び出した別れ惜しむ
人達裏切った結果になった
こんなボロボロの夢人じゃ
どうしようもなかった
そんな時に会った人々
さうと人はそんなに強くない
だから嫉妬やエゴに
飲まれてしまふそれになるよ
でもそんな僕を
優しく抱きしめた
近江兄弟社 重田乃胡

京都新聞賞

重田乃胡

高 2 年

現代生活の基調をなすものに合理主義があげられます。食べものにおいても、かりです。単に食べるのではなく、積極的に健康を獲得するためにも、合理的な食生活というものを心得ておかなければなりません。それには栄養上のバランスのとれた食品を摂取すること、とはいってもありませんが、同時に、いかにしてその栄養を調理などによって破壊、破壊することなく摂取するか、というのも充分に知っておくべきです。行きあたりばつり、食生活は栄養バランスを予しやすく、従って合理的な栄養摂取にそわなさいことなるので、充分注意したいものです。 立命館守山高校 二年 守本 菜

大津市教育委員会教育長賞

守本 菜

高 1 年

ヒワマスはサケ科に属する淡水魚で琵琶湖にのみ生息する固有種です。産卵期には大雨の日に群れをなして河川を遡上することから、アメノウオとも呼ばれています。大きいものでは60cmほどに成長するヒワマスは、刺身にする時鮮やかなサーモンピンクの身に、上質な脂がたつぷり。のっており、口の中でとろけて旨味が広がる様子はまさに絶品です。
守山高校 一年 中村 公美

滋賀県書道協会賞

中村 公美

高 1 年

大黒柱 土用波 金閣寺
合言葉 砂時計 矢車菊
水口東高 一年 榎 翔太

滋賀県書道協会賞

榎 翔太

滋賀県書道協会賞

福井 貴 瑛

時に、残月、光冷やかに、白露は地に降り、樹間を渡る冷風は、すやかに曉の
近きを告げていた。人々はもはや事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の
薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。なぜこんな運命になったか分からぬと。
先刻は言ったが、一考えよ。考えよ。思ひ当ることを全然なすでもない。
人間であった時、俺は努めて人との交わりを避けた。人々は俺を偽儼だ、尊大だ
と言った。実はそれがほとんど羞恥心に近いものであることを人々は知らなかつた。
中島敦「山月記」より 膳所高校 二年 福井 貴瑛

滋賀県書道協会賞

阪上 琴 美

書表現は、素材である漢字の性格によって特色づけられたところ
が多いと思われれます。また、その表現法を用いることにより、わが国では、
独特の美観の書が生まれ、漢字においても日本の特色を發揮すること
とができました。韓国にはハングル文字を用いた書表現もあり、他の各国
各種の文字も、書表現の可能性を持っていると思われれます。毛筆で一
筆して書かないと書音ではない、という意見がありますが、これは自らの
領域を狭くする考え方だと思います。書の長い歴史の中で毛筆が
果たした役割は、まことに大きかったと思います。二年 阪上 琴美

滋賀県書道協会賞

長井 梨 花

書は四千年の歴史を綿々と現代にまで生き続けているが、この書は現代あるい
は、将来に対して果していかなる意義を持つべきであろうか。意義を持つとす
れば、我々は、この書をいかに現代に生かすべきだろうか。また書は、他にはその例
を見ない東洋独自のものであったが、単に特殊な芸術ということに尽きるもの
であろうか。もし東洋という地域を越えて、世界に貢献するものとするならば
それは、いかなる意味においてであろうか。このことは書にたずねる人々だけで
なく、我々の東洋文化を愛する人々、人類の幸福を願う人々すべての重大な
関心事であるに相違ない。森田子龍のことは 伊吹高 二年 長井 梨花

滋賀県書道協会賞

鳩山 七 海

奈良、飛鳥のまわりの山々は、そのくらゐ荒れて、新都を造るといっても、近くの
山々からは良材が集められなくなっていた。そこで建築材の供給源となつたのが、琵琶
湖沿岸の森であった。ことに湖の東南にあたる田上山一帯の檜であった。琵琶湖
から奈良、飛鳥までは遠い。しかし、淀川水系の瀬田川、宇治川、木津川を使えば
奈良盆地まで運んでくることができる。この水の道がなかったならば、藤原京も平城京
もその都市建設はひどく困難なものになつたろう。万葉集巻一に、藤原原の宮の役
に立つ民の作れる歌がある。藤原京造営に徵発されて田上山の木の運送に従事
した役民の歌である。 宇山北高 二年 鳩山 七海

滋賀県書道協会賞

稲永 美 穂

羽根 かな 天使はほくに言、た
家へ帰る地図をなくした
非力なぼくは絵筆を執、て
乾いた絵の具に水を注ぎ

この目が光を失つても
ぼくは描いておける
この手が力を失つても
ぼくは描いておける

威張、てる格で猫が僕、てた
あかいて生きろぼくは僕、てた
狭く小さいパレットの上で
混ざる事なき強き意志を

暗くて冷たい世界でも
ぼくは描いておける
赤く燃える陽が空を抜ける絵を
ぼくは描いておける

誰かの為、に何か出来る、て
それだけ、でまたこれからは
SPRAY「Drawing days」
伊吹高3年 稲永 美穂

京 都 新 聞 賞

船 木 す み れ

滋賀 京都 奈良 大阪 兵庫 岡山
広島 香川 徳島 高知 愛媛 青森
山形 長野 東京 岐阜 宮城 熊本
堅田 三年 船 木 す み れ

滋賀県知事賞

中村 真 優

どことなく懐かしい匂いがした。窓からは中央に緑色の市街電車が走
る広い通りが見渡せた。落ち着けやうな部屋だ。コピーマシンも液晶
テレビもなかったが、そんなものはどうせ使わない。「ありがと」。この部屋
でいよいよつくるはポリーに言った。そして一ユーロ硬貨を二枚、チップと
て渡した。ポリーはにこりして、賢い猫のようににやんと部屋を出て行った。
村上春樹の作品より 水口東高校 三年 中村 真優

滋賀県書道協会賞

矢野 永 真

やまとうたは、人のこころをたねとて、よんづのこころのは
とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ「げきものなれば
心におもふ」とを、見るものきくものにつけて、ひいたせるかろ。
花になく、くひす、水にすむ、はづのこえをきけば、きこし
けるもの、いつれか、うたをよまざりける。 大東高二年
矢野 永真

